春未だ浅き 綾なす紫雲を分け出 和ゎ の光輝ける 曙ぽん

秋も闌け行く北

製の外に

久をを 彩色られ行く青春 らかに歌はなん の迷夢を求めつつ の

思なる 静っか 楡林に鐘はなり響く かに迫る此 れの迪を恵 心ぬれば

四

馬橇の鈴の 声え 雪の大路を歩みつつ 、をかぎりに寮歌うたふ、 の音も絶え L

陽光燦然乱

れ入る

への窓辺に書よめ

ば

に年経るアカシヤの

星<sup>せ</sup>い 斗と 凍<sup>®</sup>れ (空のかなたへ消えて行く) は 高たか るも く冴ゆる夜ょ のみ な 経か の 7

床<sup>ゅ</sup>し 寮に 庭<sup>は</sup>

つか心懐の極みなく き薫香漂ひて

> 聖<sup>き</sup> き 白はくやら の華乱れ 都に寂寥の の夕べ とぶ

Iでて

き「 Ŧi. 理り

憧゙゙゙゙゙゙゙ 高が たぎる生命を託 れ集ふ若人の 想き と ·純精情 うつ

月下に酌むや楡の宴 情熱のかがり火打ち囲 ざや謳歌へ へん記念祭

み

に